

カトリック山手教会月報

やまて

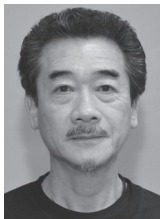


編集・発行 カトリック山手教会 広報委員会 〒231-8652 横浜市中区山手町44番地
☎ (045) 641-0735 <http://catholicyamate.org/>

第612号 2021年2月14日

「神の視点」に立つこと

主任司祭 ミカエル鈴木 真



聖書に出てくる言葉のものと意味を調べると、往々にして日本語訳にはない重要なポイントがあることに、いつも気付かされます。

例えば何かの折に話すことですが、「回心」。日本語では「改心」ですが、この漢字の言葉にしたところに、訳した方のご苦労もうかがえます。元のギリシャ語は〈メタノイア〉で、“視点を変える”という意味だそうです。神さまの視点へと、わたしたちのそれを変えていくこと。よく“生活の一部修正ではなく、生き方そのものを変えること”などとも言われますが、そうすると、ちょっとビビりますよね。では「神さまの視点」とは何か。それは、〈いのちの痛み苦しみに、常に敏感であること〉。そこからこの〈メタノイア〉を「共感」と訳す学者もいます。要するに、神と人へと目を向けること。これは、「罪」と「祈り」という二つの要素ともつながってきます。この二つは行為を表す概念ではなく、「心の状態」である、と言われます。「罪」とは心が神さまから離れている状態、そして、逆に「祈り」とは神さまに心が向いていること。「人間は神の前では、みな罪人」と言われるのは、日本語とはちょっと違うこの二つの言葉の意味によります。わたしたちは祈っているとき以外は、たいてい「罪」の状態にあるわけですね。しかし、自己意識を持っ

て生きているわたしたち人間は、たいてい心を「自分」に向けています。それこそ「罪」の状態、と聖書は言うわけです。そして、だからこそ、わたしたちは、たびたび「神と人」へと心に向け直す必要がある。それを「回心」と言い表したのだと思いますし、教会が「絶えざる回心」の必要を説くのも、その意味です。「改心」だと心は自分に向いたまま…そこからすると、「悔い改め」は誤訳としか思えません(あんまり言うと怒られますが…)。

今年も間もなく四旬節を迎えるにあたり、いつも「神さまの視点」に立ち直し、今、誰が一番痛み苦しんでいるのか、心を自分の外へと向け直したいと思います。

鈴木真師主日ミサ説教

2020年11月15日：年間第33主日A年

マタイ福音書 25章14-30節

『『タラントン』のたとえ』は全体が長いので、短いバージョンで読んでもらいましたが、このあと預かった1タラントンを土に埋めておいたしもべが主人に叱られてしまう、という話です。

前にも話しましたが、このタラントンという貨幣単位は、とんでもないもので、タレントの語源にもなったと言われています。

『聖書と典礼』の注書きにもありますが、タラントンはギリシャの貨幣単位で6,000デナリオンに相当します。1デナリオンが1日分の労働の給料

なので、6,000日分です。乱暴なやり方ですが、わかりやすいように1デナリオン=1万円とするなら、1タラントンは6千万円、2タラントんで1億2千万、5タラントんだとなんと3億円です。そりゃあビビって土に埋めたくもなるよなあ…と思いますが、マタイは人間がそれだけのものを神さまから預けられている、ということを強調します。

ところで、我々司祭は「司祭」というだけで、さまざまな肩書、と言うか役職を背負わされます。今現在、わたしが抱えている役職を数えたら15ありました。かつて20を超えていたときもあります。そのころは、まだ40代で、あまりに多くて、わけわからなくなると同時に、あまりの責任の重さに、しばしば胃が痛くなりました。こりゃ、背負いきれない…。そもそも、わたしが最初に主任司祭になったのは36歳のときでした。忘れもしない24年前、ここ山手の助任だったとき、急な人事だったようで、年があけてから当時の教区長、濱尾司教さんに呼ばれて、「二俣川の主任をやるように」と言われました。えー、二俣川って…そんな大きな教会、こんな若造が主任になっていいのか…と動揺していると、濱尾司教さんは「大丈夫、大丈夫、顧問たちはみんな賛成した」とか言うわけです。無論わたしたちは司教に行けと言われてたところに行くわけで、自信なんて全くないながらも「…はい」と答えました。しかしながら、その後の山手での復活祭のわたしの送別会のときに、ポロっと「まあ昔は30代で主任なんて考えられなかったな」とか言っちゃうわけで、おいおい…はしごを外すようなこと言わんでくれ、と思いました。しかし、50歳を超えて改めて実感したのは、何かするのは「わたし」じゃない、働かれるのは常に神さまご自身なのだ…ということでした。「わたし」は、あくまでも、その道具…、司祭になったときから分かっていたはずなのに、その肩書の重さになんかどうしてもしろく自分がいました。

今日の「『タラントン』のたとえ」も同じだと思います。わたしたちに預けられているものは、とてつもないものだけど、それを実際に使われるのは神さま。「わたし」が何かしなければ、と考えると、怖くなって土に埋めたくなくなってしまうのでしょうか。

とはいうものの、今回は横浜雙葉学園の理事長という肩書が回ってきちゃいました。さすがに土に埋めたくなくなっただけ、そういうわけにもいきません。…なので、どうぞ、みなさん、お祈りください。わたしを使って、神さまご自身が働いてくださるように。

計り知れないものをわたしたちに託されておられる神さまが、それを使って働かれていることに、共に目を向けることができますよう、祈りたいと思います。

2020年11月22日（日）王であるキリストA年 マタイ福音書 25章31-46節

今日の説教は、「子どもとともにささげるミサ」の代わりとして、子どもたちに向けてお話しさせていただきます。

小学生の皆さん、元気ですか？前からお知らせしていたように、昨日、5人のお友達が洗礼を受け、そしてそのお友達を含めた13人が初聖体を受けました。そのお友達たちとご家族に神さまからの豊かな祝福がありますように、一緒にお祈りしましょうね。

さて、今日は「王であるキリスト」の日曜日です。イエスさまは王さまだ、と言うのですが、イエスさまと「王さま」ってなんだかイメージが合いませんよね。王さまというと、太っていて冠をかぶっていて、豪華な服を着て威張ってる感じですけど、それとは全く逆のイエスさまが何で「王さま」って呼ばれるのでしょうか。実は、ここには聖書における「王さま」という存在の複雑な事情があります。

その昔、イスラエルの国では、長いこと王さまを決めませんでした。神さまこそが王さまだから人間の王さまはいらない、としていたんですね。でも、そのうちに、やっぱり国をまとめる王さまが必要になって、しょうがないから人間の王さまを決めるにあたって、イスラエルの人たちはとっても厳しい決まりをつくりました。国民の誰よりも神さまと人を大切に人じゃなきゃダメ、というものです。でも、いざ人間の王さまが選ばれると、誰もその決まりが守れませんでした。その結果、イスラエルの国は滅びてしまいます。イエスさまが生まれる500年くらい前の話です。みんながっかりしました。でも、

そんなイスラエルの人たちに、神さまはこう言われました。「大丈夫、人間の王はやっぱりダメだったけど、どんな人が神さまの目にふさわしいか、それをすべて示してくれる人をわたしは遣わすよ」そして、イエスさまがお生まれになったんです。そのイエスさまは「あなたたちの中で偉くなりたい人は、すべての人に仕える者になりなさい」とおっしゃって、ご自分でもその模範を示されました。最後の晩餐の時、イエスさまは弟子たちの足を洗いだしたんですね。「足を洗う」のは当時、奴隷の仕事でした。弟子たちはびっくりして、「先生、そんなことしないでください」と言うと、イエスさまは言われました。「あなたたちの先生であるわたしが、あなたたちの足を洗ったんだから、あなたたちもお互いの足を洗い合いなさい」それが「すべての人に仕える」ということのしるしです。そしてイエスさまは、すべての人を救うために自ら十字架を背負いました。だから、今日の福音の箇所にあるように、イエスさまは言われます。「わたしの兄弟である、この最も小さい者の一人にしたことは、わたしにしてくれたことなのだ」。そんなわけで、すべての人の救いのためにご自分をおささげになったイエスさまを、聖書では「この方こそが神さまの目から見た本当の王さまだ」とするんですね。

「イエスさまこそが本当の王さま」ということを思うと、わたしは二つのことを思い出します。一つは中学1年生になったとき。わたしは鎌倉市立第一中学校というところに入りましたが、毎朝、学校に行くと、必ず一人のおじさんが校門のところを掃除をしていました。用務員さんだと思っていたら、実は、その人は校長先生でした。あとから聞いたら、その校長先生は、毎朝誰よりも早く学校に行き掃除をしていたそうです。すごいですね。

もう一つは、司祭になるための神学校というところに入ったときのこと。神学校に入学した日、荷物をたくさん抱えて階段を上っていたら、一人のおじさんが壁にペンキを塗っていました。ペンキ屋さんかと思ってその横を通り過ぎようとしたら、その人が振り向いて「やあ鈴木君、いらっしゃい」と言ったんです。よく見ると、その人は神学校の校長先生で

した。いやあ、なかなかできることじゃありませんね。

わたしたちも、イエスさまがおっしゃったように、すべての人のお手伝いができるように、それも、最も困っている人を助けることができるように、神さまの助けを願って祈りたいと思います。

2020年12月6日：待降節第2主日B年

マルコ福音書 1章1－8節

毎年、待降節の第2・第3主日は、洗礼者ヨハネに関する箇所が読まれることになっています。救い主到来の準備のために遣わされた洗礼者ヨハネに目を向けることで、わたしたちも主の降誕に向けての準備を意識しよう、ということです。

「洗礼者ヨハネ」という存在に目を向けると、ちょっと謎めいているということもあって、色々なことを思います。

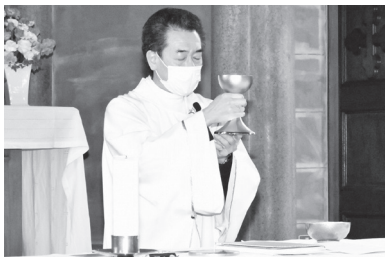
マルコ福音書は、あまり多くを語りません。今日の箇所の次に出てくるのは、なんとヘロデに首を切られてしまうところ…。ルカは洗礼者ヨハネがイエスの親戚…と位置付ける割に、マタイとルカは共に、牢に入れられたヨハネが「来たるべきお方はあなたですか？」と弟子に聞かせています。ヨハネ福音書にいたっては、洗礼者ヨハネ自身に最初から「わたしはこの方を知らなかった」と言わせます。

つまり、〈知らない人のために準備をした〉…これも洗礼者ヨハネを見るうえで、大きなポイントでしょう。それって、すごいことだよなあ…とも思いますが、よくよく考えてみると、実はわたしたちも同じなのかもしれない、と感じます。どういうことかと言うと、今、自分がしていることの意味、それをわたしたちは分かっているつもりでやっていますが、実は意外なところにそれがつながっていく…つまり、本当の意味は、あとで明らかにされる、ということです。その意味では、わたしたちも往々にして〈知らないことのために準備している〉、いや〈させられている〉のかもしれない。

語り草にしていることですが、わたしは学生の時、教職課程を履修しました。別に教師になろうと思ったわけではなく、「教員免許くらい取っとくか…」といった程度のものでした。ところが教育実習

に行ったとき、なぜか「これは違う」とはっきり感じました。どうしてかは分かりませんが、「この道に行けとは言われていない」と感じたんです。もともと教師になるつもりもなかったのに、当然、教員採用試験も受けませんでした。なのに…そんなわたしを神さまは、司祭としてカトリック学校に長年送り込み、果ては理事長までやれ…と。「神さま、一体どういうことですか？あの時の『違う』は何だったのですか？」と言いたくなりますが…違う見方をするならば、今の自分に神さまがすべてをつなげておられた…とも言えます。

人生何が起きるか、本当に分かりません。でも、これから起きる何かのために、神さまは今の「わたし」をここへ、と遣わされているのでしょう。願わくば首を切られるのだけは勘弁してほしいですが、洗礼者ヨハネに目を向ける中で、わたしたちの「これから」の中にも働かされる神さまのわざに、しばし心に向けつつ、共に待降節を過ごしていきたいと思えます。



鈴木師主日ミサ司式